

## 平成 28 年度 弘前城跡本丸石垣発掘調査現地説明会資料

平成 28 年 11 月 3 日 (祝)

今回の発掘調査区である東側石垣北端の石積みは、発掘調査前の表面観察から、慶長の築城期の石垣がそのまま残っているものと推測されていました。しかし、発掘調査により、天端石と上から2石目の背面に詰められた裏込めの中から、近代以降のガラス片等が出土し、上部2石目までは後の時代に積み直されていることが判明しました。

その一方で、上から3石目の背面には、白色粘土層（盛土④）にパックされた状態で、人頭大のまるい石を詰めた幅約2mの裏込を確認しています。この白色粘土層は瓦を含んでおり、弘前城に瓦が導入された後に造成されたものと考えられます。また、白色粘土層の下には、内濠に向かって傾斜する黄褐色粘土の法面が検出されました。法面は築城時の工事の痕跡であるかもしれません。これらの土層が、江戸時代のいつ頃に造成されたものなのか、今後調査を重ねていきます。

発掘調査は、本丸東側石垣の解体修理に先立って行われているものです。調査には平成25年度から着手しており、今年で4年目となります。

平成25～27年度までは、天守台の北側700㎡程度（約77m×10m）を対象範囲として発掘調査を実施しました。その結果、天守台から北に約60m地点までという広範囲において、明治～大正時代の石垣修理の痕跡を確認しています。明治～大正時代の石垣修理は、少なくとも天端石からの深さ250cmよりも下部にまで及んでおり、大規模なものといえます。また、調査区の北端には、江戸時代の元禄期に築かれた石垣に伴うものと思われる盛土層が良好に残っていました。

平成28年度は、天守台とその周辺の187㎡と、東側石垣北端に残る慶長期といわれる石垣の背面133㎡の発掘調査を実施しています。天守台上面には、径3～7cmほどの玉砂利が敷かれていましたが、それを除去したところ、石垣の石材ほどの大きな石が、敷き詰められているような状態で出現しました。また、これら大型石の下部に堆積する盛土を掘削したところ、明治時代以降（近代）のガラス瓶の破片が出土しました。



白色粘土層（盛土④）の下に検出した法面（東から）



白色粘土層（盛土④）断面（北東から）



白色粘土層（盛土④）からの瓦出土状況（南西から）



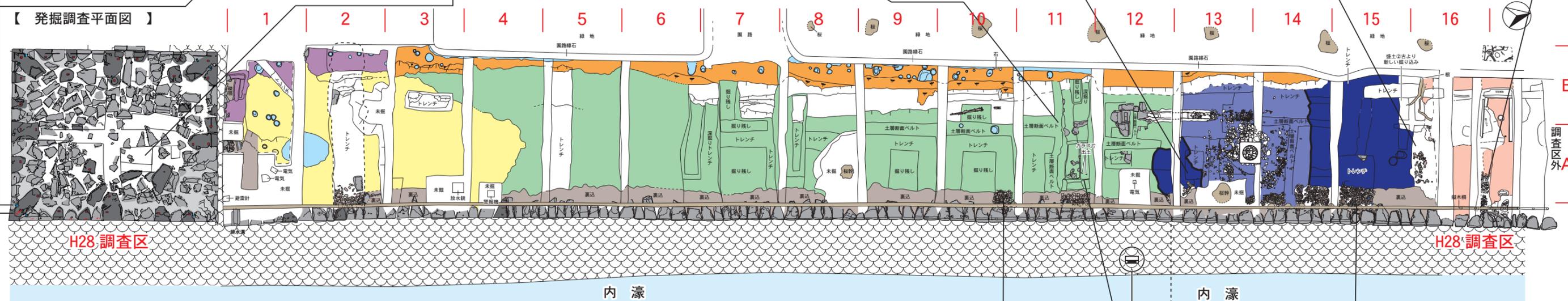
天守大引と天守台表面の大型石

- ◆ 千切（鉄製）
- コンクリート・モルタル
- 石材
- 大引下面のホゾ穴
- 天端石等のホゾ穴

【発行】青森県弘前市都市環境部公園緑地課弘前城整備活用推進室  
 〒036-8356 青森県弘前市大字下白銀町1 平成28年11月3日発行  
 TEL: 0172-33-8739 FAX: 0172-33-8799



天守台天端石南東隅 チキリ(北西から) 天守台天端石に見られる近代の番付(北西から) 天守台の盛土層(北東から) A・B11 近代の盛土堆積状況(北東から) A13 元禄の盛土堆積状況(北西から) 白色粘土層上面に配置された礫(北東から) 東側石垣北端 野面積石垣背面の裏込(西から)



H28調査区 内濠 H28調査区



弘前城天守台全景(掘削前)



弘前城天守台全景(掘削開始後)



A10 近代の裏込(南西から)



A15元禄期と思われる裏込(南西から)



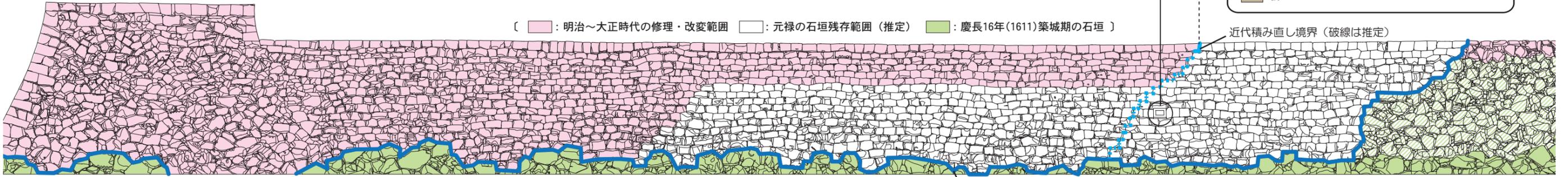
近代の石垣修理範囲から出土したガラス瓶の破片

凡例

褐色粘質土	近代の遺物を含む盛土
白色粘質土	
盛土②新	
井戸枠下の掘り込み(遺構内堆積土に近代の遺物を含む)	近代の遺物を含む盛土
盛土②古(元禄の盛土と想定)	
盛土③(慶長の盛土と想定)	
盛土④	
近代以降のビット・掘り込み	近代の遺物を含む盛土
ホソ穴のある天端石・大型石	
天端石・大型石	
裏込・礫層	
モルタル	
根	

【 発掘調査で分かった石垣の時期 】

( 〇 : 明治~大正時代の修理・改変範囲 〇 : 元禄の石垣残存範囲(推定) 〇 : 慶長16年(1611)築城期の石垣 )



0 10m (S=1/250)

石材の形状が違う境目